日本
プロレタリア
文学大系

6

責任編集　平野謙　厩原惟人
小田切秀雄　野間宏　竹内好

日本プロレタリア文学大系

6

弾圧と解体の時代　上

文化連盟の成立から中日戦争の開始

三一書房

日本プロレタリア文学大系　6　定価一二〇〇円

一九五四年十一月三十日　第一版発行
一九六九年　六　月十五日　第三刷発行

編者代表　野　間　宏
発行者　竹　村　一
発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京（二九一）三一三一～五
振替東京　八四一六〇番
郵便番号　一〇一
印刷　文栄印刷株式会社
製本　有限会社佐伯製本所
落丁・乱丁本はおとりかえします
©1954年
全9巻　第7回配本

第六巻

「弾圧と解体の時代」

（上）

凡　例

一、収載作品はできるかぎり初出の新聞・雑誌によって校合した。ただし仮名づかいはすべて新カナに改め、伏字はおおむねもとのままとした。

二、収載作品の配列は、小説・戯曲、評論、詩・詩論、短歌、俳句の各文学ジャンル別にしたがった。無署名のアッピールなどは資料として評論の部に編入した。

三、各ジャンル内の収載作品は、原則として発表年月順によったが、ときに執筆年月によって配列した場合もある。

四、短歌・俳句の作品選定は、各巻をとおして、渡辺順三、栗林一石路の両氏に協力をあおいだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第六巻　目次

I　小説

党生活者……小林多喜二……三
青年抄……林房雄……六二
清水焼風景抄……加賀耿二……七六
亀のチャーリイ……藤森成吉……八一
女性苦抄……松田解子……一〇一
因われた大地抄……平田小六……一〇九
村の次男……和田伝……一二三
白い壁……本庄陸男……一三二
牡丹のある家……佐多稲子……一五五
盲目……島木健作……一六八
炭坑抄……橋本英吉……一九二

II　評論・声明書

日本プロレタリア文化連盟の任務……二〇五
機関紙『プロレタリア文学』創刊に際して……二〇九
国際革命作家同盟加入に際して檄す……二一一
「文学新聞」通信員規定……二一三
労農芸術家連盟解散の辞……二一四
政治と芸術抄……宮本顕治……二一五
作家として……林房雄……二二〇
最近の所謂「歴史小説」の問題によせて……本多秋五……二二八
プティ・ブルジョア・インテリゲンツィアの道……平野謙……二四四
一連の非プロレタリア的作品……宮本百合子……二五五
右翼的偏向の諸問題……小林多喜二……二六八
創作方法上の新転換……徳永直……二七七
文学運動の新たなる段階のために……鹿地亘……二八六
ナルプ解体声明……二九四

III 詩・短歌・俳句

詩

生ける銃架……槇村浩……三〇三
間島パルチザンの歌……槇村浩……三〇五

スパルタクスの道を……上野壯夫…三〇九
蕗のとうを摘む子供等……長沢佑…三一一
別れ……木原豹…三一三
日織のオルグへ……松原信…三一五
時計……田村武…三一六
鉄骨の上にて……佐川光二郎…三一六
紺の胴体……後藤郁子…三一七
役所の中から……今泉純…三一八
新しい習慣を組織しよう……遠地輝武…三一九
高い窓……西沢隆二…三二〇
五月一日に……山田清三郎…三二一
今夜おれはお前の寝息を聞いてやる……中野重治…三二三
やられた友に……松山達枝…三二四
中国の同志へ手をさしのべる……橋本正一…三二五
旋盤工の歌……林光範…三二六
低気圧へ……小熊秀雄…三二七
俺達は機械だ！　輝かしい音……大江満雄…三二八
煙に曇る夜の屋根裏……沖田英雄…三三〇
芝浦……村田達夫…三三一

デンタンよ！……姉川茂安…三三四
除草機……桜井徳太郎…三三五
橋……杉沼秀七…三三五
若いやもめ……森山啓…三三六
あの三人について……久木仁吉…三四〇
示威へ……北山雅子…三四〇
デスマスクに添えて……松田解子…三四二

短歌

靴下の穴……浦野敬…三四三
今日と明日との間……井上鎧三…三四三
就職苦難……土田秀雄…三四三
時事即詠……内山秦一…三四四
病父……山本萌…三四四
被告入廷……矢代東村…三四四
片貌……太田林次郎…三四六
工場街……正田長一郎…三四六
生活断片……正田良…三四六
農民の顔……長谷川俊雄…三四七
ガス社外工スト……坪野哲久…三四七

春……石井光…三四七
二月三日……梅田順三…三四八
追懐……青野谷夫…三四八
啄木を思いつつ……石井光…三四九
むちに抗す……西原正春…三四九
白い嵐……川崎むつを…三五〇
私の生活から……泉春枝…三五〇
ある朝……渡辺順三…三五〇

俳句

栗原一石路…三五二
神代藤平…三五二
横山林二…三五二
米林米翁…三五二
戸塚宮吉…三五二
清内路二…三五三
時田繁二…三五三
村井千代…三五三
神代藤平 丸木進 合作…三五三

阪川志郎……三五三
原田竜夫……三五三
風間光作……三五四
鍛冶正……三五四
冴山路……三五四
宇野輝夫……三五四
逢阪薊……三五四
綾木紅潮……三五四
一農余治……三五四
関せん子……三五五
黒木哲……三五五
橋本夢道……三五五
北野三郎……三五五
藤田啓二……三五五
森秀男……三五五
太田良吉……三五六
北城子……五五六
江口渙……三五六
失名……三五六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

鍛冶　正……三五六
康　雄……三五六
F　Y　生……三五六

解説……野間　宏……三五七

年表……（一九三二・一～一九三四・三）……日本近代文学研究所編……三八七

I

小

説

党生活者

小林多喜二

一

洗面所で手を洗っていると、丁度窓の下を第二工場の連中が帰りかけたとみえて、ゾロゾロと板草履や靴バキの音と一緒に声高な話声が続いていた。

「まだか？」

その時、後に須山が来ていて、言葉をかけた。彼は第二工場だった。私は石鹸だらけになった顔で振りかえって、心持眉をしかめた。――それは、前々から須山との約束で、工場から一緒に帰ることはお互避けていたからである。そんな事をすれば、他の人の眼につくし、万一のことがあった時は一人だけの犠牲では済まないからであった。ところが、須山は時々その約束を破った。そして「やアあまり怒るなよ」そんなことを云って、人なつこく笑った。須山はどっちかと云えば調子の軽い、仲々愛嬌のある、憎めないたちの男だったので、私はその度に苦笑した。が、今は時期が時期だし、私は強い顔をみせたのである。それに今日これから新しいメンバーを誘って、何処かの「しるこ屋」に寄る予定にもなっていた……。が、フト見ると、ひょウきんな何時もの須山の顔ではない。私はその時私たちのような仕事をしているもののみが持っているあの「予感」を咄嗟に感じて、――「あ直ぐだ」と云って、ザブザブと顔を洗った。

相手にそれと分ったと思うと須山は急に調子をかえて、「キリンででも一杯やるか」と後から云った。が、それには一応何時もの須山らしい調子があるようで、しかし如何にも取ってつけた只ならぬさがあった。それが直接に分った。

外へ出ると、さすがに須山は私より五六間先きを歩いた。工場から電車路に出るところは、片方が省線の堤で他方が商店の屋並に狭められて、細い道だった。その二本目の電柱に、背広が立って、こっちを見ていた。見ているような見ていないようなイヤな見方だ。私は直ぐ後から来る五六人と肩を並べて話しながら、左の眼の隅に背広を置いて、油断をしなかった。背広はどっちかと云えば、毎日のおきまり仕事にうんざりして、どうでもいいような物ぐさな態度だった。彼等はこの頃では毎日、工場の出と退けに張り込んでいた。須山はその直ぐ横を如何にも背広を小馬鹿にしたように、外開きの足をツン、ツンと延ばして歩

いていく。それがこっちから見ていると分るので、可笑しかった。

電車路の雑沓に出てから、私は須山に追いついた。彼は鼻をこすりながら、何気ない風に四囲を見廻し、それから、

「どうもおかしんだ……」

と云う。

私は須山の口元を見た。

「上田がヒゲと切れたんだ……」

「何時だ？」

私が云った。

「昨日。」

ヒゲは「予備線」など取って置く必要のない男だとは分っていたが、

「予備はあったのか？」と訊いた。

「取っていたそうだ。」

彼の話によると、昨日の連絡は殊の外重要な用事があり、それは一日遅れるかどうかで大変な手違いとなるので、S川とM町とA橋この三つの電車停留所の間の街頭を使い、それもその前日二人で同じ場所を歩いて「此処から此処まで」と決め、めずらしいことにはヒゲは更に「万一のことがあったら困る」というので、通りがかりに自分から安全そうな喫茶店を決め、街頭で会えなかったら二十分後にしようと云い、しかも別れる時お互の時計を合わせたそうである。「ヒゲ」そう呼ばれているこの同志は私達の一番上のポストにいる重要なキャップだった。今迄ほぼ千回の連絡をとったうち、（それが全部街頭ばかりだったが）自分から遅れたのはたった二回という同志だった。我々のような仕事をしている以上それは当然のことではあるが、そういう男はそんなにザラには居なかった。しかもその二回というのが、一度は両方に思い違いがあったからで、時間はやっぱり正確に出掛けて行っているのである。モウ一度はその日の午後になってから時計に故障があったことを知らなかったからであった。他のものならば一度位来ないとしても、それ程ではなかったが、ヒゲが来ない、予備にまで来ないという事は私達には全く信ぜられなかった。

「今日はどうなんだ？」

「ウン、昨日と同じ処を繰りかえすことになっているんだって。」

「何時だ。」

「七時——それに喫茶店が七時二十分。で俺はとにかくその様子が心配だから、八時半に上田と会うことにして置いた。」

私は今晩の自分の時間を数えてみて、

「じゃ、オレと九時会ってくれ。」

私達はそこで場所を決めて別れた。別れ際に須山は「ヒゲ、「がやられたら、俺も自首して出るよ！」と云った。それは勿論冗談だったが、妙に実感があった。私は「馬鹿」と云った。が彼のそう云った気持は自分にもヨク分った。

――ヒゲはそれほど私たちの仲間では信頼され、力とされていたのである。私達にとっては謂わば煙台みたいな奴だと云っても、それは少しも大げさな云い方ではなかった。事実ヒゲがいなくなったとすれば、第一次の日からして私達は仕事をドウやって行けばいいか全く心細かった。勿論そうなればなったで、やって行けるものではあるが。――私は歩きながら、彼が捕まらないでいてくれればいいと心から思った。

私は途中小さいお菓子屋に寄って、森永のキャラメルを一つ買った。それを持ってやってくると、下宿の男の子供は、近所の子供たちと一緒に自働式のお菓子の出る機械の前に立っていた。一銭を入れて、ハンドルを押すとベース・ボールの星に球が飛んでゆく。球の入る星によって、下の穴から出てくるお菓子がちがった。最近こんな機械が流行り出し、街のどの機械の前にも沢山子供が群がっていた。どの子供も眼を据え、口を懸命に歪めて、ハンドルを押している。一銭で一銭以上のものが手に入るかも知れないのだ。

私はポケットをジャラジャラさせて、一銭銅貨を二枚下宿の子供にやった。子供は始めはちょっと手を引ッこめたが、急に顔一杯の喜びをあらわした。察するところ、下宿の子供は今まで他の子供がやるのを後から見てばかりいたらしかった。私はさっき買ってきたキャラメルも子供のポケットにねじこんで帰ってきた。

私は八時までに、今日工場に起ったことを原稿にして、明日撒くビラに使うために間に合わせなければならなかった。それを八時に会うSに渡すことになっている。私は押入の中から、色々な文書の入っているトランクを持ち出して、鍵を外した。――「倉田工業」は二百人ばかりの金属工場だったが、戦争が始まってから六百人もの臨時工を募集した。私や須山や伊藤（女の同志）などはその時他人の履歴書を持って入り込んだのである。二百人の本工のところへ六百人もの臨時工を取る位だから、どんなに仕事が殺到していたか分る。倉田工業は戦争が始まってからは、今迄の電線を作るのをやめて、毒瓦斯のマスクとパラシュートと飛行船の側を作り始めた。が最近その仕事が一段落をつげたので、六百人の臨時工のうち四百人ほどが首になるらしかった。それで此頃の工場では、話がその事で持ち切っていた。皆が「首になる」「首になる」と云うと、「会社では臨時工に首なんかモトモトある筈がない。かえって最初の約束より半月以上も長く使ってやっているじゃないか」と云った。事実約束よりも半月以上も長く働いたが、切ッぱつまった仕事ばかりなのでその間の仕事はとても無理なのだ。女工などは朝の八時から夜の九時まで打ッ通し夜業をして一円〇八銭にしかならなかった。夜の六時から九時までは一時間八銭で、しかも晩飯を食う二十分から三十分までの時間を、会社は夜業の賃銀から二銭或いは三銭

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.